

「愛飲の皆様に、おトクなニュースです」

日本をはじめ、アメリカ・中国の州、国立大学でも研究用に採用された

# 高品質 飛騨霊芝

よいものだからこそ長く愛飲してほしい、そう考えたから、この価格が実現しました。三十年以上にわたる科学的栽培研究、栽培実績の成果を結集したのが「飛騨霊芝」です。その品質は国内・海外で高く評価され、研究用霊芝として採用されています。飛騨霊芝は商標です。

だから長期愛飲者こそ、自信を持ってお勧めします。



1kg 30,000円  
500g 17,000円

ご注文・お問合せ

インターネット(24時間受付)

<http://www.dai-yakusan.co.jp/>

飛騨霊芝 第一薬産

お電話

0120-32-0963

※送料・送料は別途お見積り  
※開封後、7日以内は返品可(送料はお客様負担)

第一薬産株式会社

〒506-0003 岐阜県高山市本母町59

自身が担当するキャバクラやクラブの経営者にも、脱税指南をしていた疑いがある。

経営者に細名が教えたのは、源泉徴収をごまかす方法。ホステスの給料は、ほとんどが出来高払いの能力給で、原則1割は源泉で徴収される。しかし、細名が指南をしたクラブは「源泉徴収なし」を売り文句に、ホステスを集めていた。店がホステスの源泉を代わりに支払っているわけではない。元同僚が続ける。

「明らかな脱税行為を、細名が見逃してやっていたとしたら考えられません。細名は大の麻雀好きで、浪速区

のある雀荘に入り浸っていました。私も何度か誘われて麻雀を打ったことがあるんですが、あるとき、いかにも水商売風の男がメンツに加わった。すると、その男がおもむろに「細名さんにはいつもお世話になって

## カネ以外に興味はない

こうして人脈を構築していった細名は、徐々にビジネスの手を広げていった。次に目をつけたのは、自身が調査をして弱みをつけた企業からの見返りだ。いかに厳しい国税の調査とはいえ、決算期直前の取引の売掛金への計上し忘れ

います」と挨拶をしてきた。世話とは何か聞いたはずと、その男が細名の担当した調査先のクラブ経営者だとわかった。調査先の経営者が調査官と気軽に麻雀を打つなんて、通常ならまず考えられませんよ」

は、注意して修正申告をさせるにしても、さほど大事にはしないのが慣例だ。なぜなら、決算期の申告漏れは、そのほとんどが意図的なものではなく、慌ただしさによる経理の単純ミスだからだ。しかし、細名は、

「何やこれは？ 過去5年分、遡って調べるぞ」と、申告ミスをした企業を執拗に責めた。税務署からそう言われた経営者は震え上がる。そうならば、細名の思う壺だった。

「5年遡るのを、2年にしたるわ」と、手心を加えて恩を売ると、その見返りの一つは、税理士をしていた父親や弟を顧問にさせることだった。「細名は同僚から一寸止め」の細名」と陰で呼ばれていました。確かに、所得をごまかす先を見つけてくるのはうまかつたのですが、そのわりに「増差所得(重加

算税対象所得)が低すぎたんです。ある程度までは調査するのですが、それ以上は明らかに追及の手を緩めていた。調査先と談合し、その見返りを暗に求めていたのでしよう」(前出・元同僚)

細名は他の調査官が1年で達成するノルマを半年くらいで片付けていたという。そして、残りの半年間を使って、父親の手伝いや新たな顧問先探しに精を出していた。「細名にとって、税務調査する会社は税金を徴収する先ではなく、私利私欲を満たすための「道具」でしかなかった。その証拠に、細

名は国税の花形部署であるマルサには一切興味がなかった。ガサ入れをして、不正を明るみに出すマルサでは、弱みにつけ込んで旨味を得る細名のビジネスはできないからです。

さらに言えば、マルサだけでなく、税務署内でチームを組んで一つの企業の税務調査を行う、「トクチョウ(特別調査)」も煩わしいだけだったようです。チームを組めば当然、個人プレーはできないですからね。トクチョウの一員に指名された細名は、会議中も上の空で、よく統括調査官から叱られていました(同前)

細名の悪事が明るみに出たのは98年。自身が申告漏れを指摘した企業に実弟を紹介したことが発覚し、懲戒免職となる。しかし、それすらも計算通りだったという見方もできる。なぜなら、国税調査官が、税理士の資格を得るには、「23年間の勤務実績」が必要だからだ。75年に国税局に入局した細名が資格を得たのは、

ちょうど23年後の98年。もはやいつクビになろうと、痛くはなかったのだ。「将来は税理士事務所を開業すると口癖のように言っていましたからね。国税に

いる間にできるだけ「顧客」を見つけていることが目的だったあの男にとって、調査官としての仕事はもう十分だったんでしよう」驚くべきことに、現職時代に培った人脈を活かし、税務署の調査に圧力をかけた国税OBは、大阪だけでなく全国に存在している。国税OBでありながら、税理士試験を受けて税理士になったという異色の経歴の持ち主である松嶋洋氏は言う。

「私が東京国税局に勤務していた頃、給料の源泉徴収をしていない企業に税務調査が入った際、追徴課税の対象額が1億円ほどに上がったことがありました。ところが、その会社の顧問を務める税務署長経験者のOB税理士が国税局の担当者に「何とかしろ」と言ったところ、課税対象額が1000万円になったんです。税

務署は絶対にはいと言いはりますが、圧力とそれに迎合する現職はまだまだ存在しているんです」

こうした「メリット」があるからこそ、後ろめたいことのある経営者たちは多額の顧問料を支払って国税OBを迎え入れる。一方、一部の国税調査官は、現役時代から「寸止め調査」を繰り返して、あらかじめ退職後の「寄生先」に目星をつ

## 家族ぐるみでタダ飯を食う

こうして利権をむさぼる国税OBがはびこる遠因には、国税局内の厳然たる「身分制度」がある。かつて税務署長は20代後半の大蔵省、財務省キャリア官僚が務めていた。一方、細名を含めほとんどの調査官はノンキャリアだ。当時を細名の元同僚が振り返る。



細名が脱税を指南していたホストクラブが入る大阪市中央区のビル

「ある税務署長は、現職時代からすでに顧問先を複数持っていました。私が知るだけでも、顧問料だけで、月に300万円以上はもらっていた。この人物は、細名よりも階級が上だったこともあり、大手企業にも顔が利いた。それだけに、かなりオイシイOB生活を送っているようです」(前出・細名の元同僚)

「キャリア署長の歓迎会や飲み会の経費は、ノンキャリアが出し合っていました。キャリアはそれが当たり前だと思っていて、自腹を切ったのは一人もいなかった。それどころか、「タダ飯」だからと、家族を連れてきた奴までいた。そいつには小学校低学年の娘がいたんですが、宴会の席でその子が40代後半のノンキャリアを指して、「この人、パパの家来？」と言ったんです。そのノンキャリアは、真っ赤

になった顔で無理矢理笑っ

ていた。そして、飲み会のあと、歯を食いしばってポロポロ泣いた。私も心の中では悔しさが胸が苦しいほどだった。なかには、歯を食いしばったまま、真面目に勤め上げるノンキャリアもいる。だが、その鬱屈した思いから、「オレもオイシイ思いをしてやる」と間違った方向に進む調査官がいるのも事実です」

キャリアの天下りがなくなったのと同様、99年度をもって、国税局によるOBへの顧問企業の「あっせん」もなくなつた。そのため、食い扶持を失い、現職との癒着に走る傾向が強まっている。大阪地検特捜部は、今回の事件を「秋の陣」として、徹底的に捜査する姿勢を見せている。細名と平良の間に金品の授受があったことを明らかにし、収賄罪での立件を目指す。それは、全国に広がる「細名予備軍」の国税OBたちへの、強い警告でもある。(文中一部敬称略)